知覚とは、多くの刺激により形成されるものである。

とか、聞いたような聞かなかったような気がしている。だからだろう。平凡を越えた退屈な日々はこのところモノの味さえ変えつつあった。いやそもそも平和とはこんな味だったか。

ストラヴィンスキーこと外田瓶介（ソトダヘイスケ）はスツールの上、わざとややこしく考えてチーズバーガーへかぶりつく。

もちろん肉汁あふれるバーガーはコクあるチーズも相まって、他の追随を許さぬ旨さだ。満喫できる状況は歓迎すべきものであり、所属する「ＳＯ　ＷＨＡＴ」対応部署、通称「ＣＣＴ」も近頃、荒事どころか臨場さえ失せている。

このまま部署は縮小、他に吸収されてしまうのではなかろうか。

囁が絶えることもなかった。

いや、相手にしてきたのは全ての娯楽を攻撃対象にすえたテロ集団「ＳＯ　ＷＨＡＴ」なら、それはあながち噂だとも思えなかった。何しろ「ＳＯ　ＷＨＡＴ」の存在は世間の混乱を回避すべくいまだもって伏せられており、なら追うコチラ側も同様で、存在意義が疑問視されつつある今、このまま「なかったこと」にしてしまうのは好都合、というやつである。しかも「ＣＣＴ」は、世界で同時多発的に起きるテロをカバーすべく国連加盟国を中心

にオフィスを設置していた。互いは迅速な連携を目的に権限を拡大、手続きを簡略化すると、史上初の「国境なき捜査機関」を形成していたりもする。ふともすれば組織は法より強い立場を取りかねず、存在を懸念する声は以前からも上がっていただけに、テロの脅威が勝ることでとれていたこのパワーバランスも崩れたところでおかしくなかった。

果てに縮小、合併されて、この身はどこへ流れつくのか。有能だが表に出せないクセ者ぞろいが我が部署なら、それこそ表舞台への復帰だけは考えづらいというものだった。

ストラヴィンスキーはずり落ちてきた眼鏡のブリッジを押し上げなおす。つまみあげた紙ナプキンで最後、丁寧に口元の脂を拭った。やはりここのチーズバーガーは絶品だ。たとえ今後、通勤先が変わろうとも、やめられそうにない。

壁のポップな時計は十時半を指しており、三交代制のミドルシフト、午後を中心とした業務開始までまだいくらもあると教えている。ならランニングでもして時間を潰すか。呑気な考えも、それまで早めにオフィスへ降りてこなしていた引継ぎ事項がめっきり減ったためにほかならない。

決めてスツールから尻を上げた。

振り返った視界の隅で小さく繰り出された会釈に注意を盗まれる。

「今日もごちそうさまでした」

注文カウンターで顔なじみの店員は、今日もポニーテールを揺らしている。頭を下げ返して歩み寄り、ゴミ箱へ食べクズを落としながらストラヴィンスキーもまた声をかけた。

そのさい妙な照れが生じるのは通い詰めておいて顔など覚えられているハズがない、と決め込み毎度、初めてのような面持ちで注文し続けてきたせいだろう。ある日、猿芝居は見抜かれると、彼女に注文の先を越されてルーティン化した行動の何たるかを思い知らされていた。

「いつもご利用ありがとうございます。明日もこの時間帯にお越しですか？」

さらに加えて言うならそんな彼女こそ、年末に買い求めたバーガーの包み紙へメッセージを書き込んだ張本人だった。おかげであの夜、常盤華（トキワハナ）に散々冷やかされることとなったわけだが、それはまったくもって面白おかしくするためだけの妄想で間違いない。証拠に今日も彼女は、業務の効率化だけをこうして図っている。

「まあ、そう、ですね。ええ」

「じゃあわたし、明日もこのシフトなのでお顔を拝見したらご用意いたしますね。そのままお席におかけになってお待ちください」

「た、助かります。あはは」

オレンジの制服にあしらわれた白のストライプがなお引き立っていた。向けられた笑み

は凛々しく、胸元には包み紙にあったのと同じ「マホ」に「Y」が添えられた名札は提げられている。

とはいえ店はニックネームを書き込む決まりになっているようで、それが彼女の本名なのかどうかは知らない。

「いってらっしゃいませ」

どうにもちぐはぐな声に見送られ、目の前に横たわる国道へ出ていた。そんな国道を幾らも行けばオフィスの入る警察病院はあり、逆方向へ十分も歩けば駅はある。徒歩で店へ訪れたように自宅もそう離れていない辺りはいわゆるビジネス街で、休日だろうと呼び出しが入ればすぐ駆けつけられるよう職員はみな、オフィスから半径四キロ内に住むよう定められいる、しかしながら駅前の名残と商業テナントの華やかさもまた残すような場所だった。つまりまんま生活圏でもあったなら、その緊張感のない風景の中をひとまずオフィスへ歩き出す。片側のテナント前には、カラフルなディスプレイを熱心にのぞき込む女性がバギーを止めて立っていた。

すれ違うかと思えたその時だ。

ストラヴィンスキーは歩調を緩めた。

なぜなら「そんな気がしたから」にほかならず、ゆっくりすれ違ったそのあとで、一歩、

二歩、と後戻ってみる。後ろで髪をひとつに束ねたその横顔を、今一度、分厚いレンズの端で確かめなおした。

と、その時、女性は気付いて振り返る。

「……へい、ちゃん？」

呟いた後の声こそ、これでもかと大きくなる。

「ああっ。やっぱりっ。へいちゃんじゃないっ」

名前は七五三（シメ）あすか。いや、この様子だと苗字は変わっているに違いない。高校時代のクラスメイトはそこで目を丸くしていた。

「ウソ。びっくりするっ。こんなところで会うなんて」

「いやいや。それはこっちのセリフ」

「ぐうっ、ぜんっ」

遠慮ない表情が、あっという間に過ぎた時間を飛び越えさせる。

「元気してたの？」

言うあすかはクラスの女子のリーダー的存在で、男子らとも対等に付き合うさっぱりした性格の持ち主だった。ストラヴィンスキーもまたその輪の一人に違いなく、共に風前の灯火だった天文部の部長と副部長をつとめている。もちろんあすかが部長で、副部長はそ

んなあすかに頼まれ請け負ったような具合だ。
　そうして次から次へと部員を勧誘していったあすかの天文部復活劇はまさに貴重な青春の思い出で、いろいろと振り回されもしたが戦友さながら、気の置けない友人の一人で間違いなかった。
「見ての通り」
「えー、すごいっ。何年ぶり、五年？　だってへいちゃん同窓会、事故ったって欠席したきりだったでしょ。連絡取れる人もいないって。このあいだも天文のあいりと話、してたところでさ、その眼鏡も最初、違う人かと思った」
　言われて「あ、そうか」と、ストラヴィンスキーはテンプルへ手をあてがう。
「そんなになるっけ。最近、手放せなくなったもんでね」
　だとしてその事故で記憶が飛ばず視力が飛んだことも、すったもんだの末に今の部署に配属されたせいで同窓会どころではなくなったことも言えはしない。はぐらかすのが面倒で付き合いから足が遠のいたのが実際だとなれば、なおさらだった。
「仕事が忙しくてなかなか時間が取れなくなったもんで。もう、そんなに経つのか」
「でもホント、元気そうでよかった。それにしてもいつからこっちへ？　こんな時間。今日はお休みとか？」

返すあすかはあっけらかんとしている。
「あ、いや。昼から仕事で。で、そこで昼を。いや朝かな。食べてた」
出てきたばかりの店をストラヴィンスキーは示す。
「まぁ、こっちへは仕事の都合でね。三年前、引っ越してきたよ」
ならあすかの驚きようへ、これでもかと拍車はかかっていた。
「ええっ、あたしも去年からこっちに来てたのに。ほら、駅前のスーパー。牛乳が安いでしょ。よく行ってるのに」
「あー、マックスなんとか。あるね」
確かに利用する店ではあったが、牛乳が安いかどうかまでは記憶にない。むしろ二十四時間営業の方が重要事項と、ストラヴィンスキーの脳にはメモされていた。
「うっそー。ホント、会わない時は会わないものね」
「いやはや」
いうほかなく、一息ついたところで頃合いだと満を持す。ストラヴィンスキーは視線を足元へとやった。
「お子さん？」
よいしょ、で屈み込めば、とたんあすかの温度が母親のソレへ変わったことを否応なく

感じ取ってみる。
「そう。去年、生まれたの。温大」
　同じく短いひさしの中をのぞき込むと、丸ボーロのような顔へ「はるとー」と呼びかけてみせた。
「このお兄さんはママの高校のお友達。クラスの女子にモテモテだった外田君よ」
　ゾウのプリントがちりばめられたおくるみは黄色く、かけられたタオルケットの中で命の限りに熱っぽさをまとい赤ん坊は、応えてもぞもぞ動いている。
「知らないうちに。これはおめでとうございます。っていうか、その紹介はどうかと」
　あやしかけて眉をへこませ、ストラヴィンスキーは苦笑いした。
「あーら、何言ってるのよ。へいちゃんは呑気だから全然、気付いていなかっただけ。どれだけ女の子を泣かせたかってハナシ。またこんこんと聞かせるよ」
「ホントにそうだったのか、疑わしいなぁ」
「はいはい、ソレソレ。そんなに鈍くてお巡りさんだとか、ちょっと心配」
　時効だからということで話は卒業した翌年の同窓会で、初めて聞かされていた。だがそれももう十年余り前のことか。
　と、言い合う語気にやられたのか、それともこのお年頃には不人気な眼鏡のせいか、さ

かいに赤ん坊は泣き始める。怯まず抱き上げるあすかの手つきは慣れており、黄色いおくるみの背を撫でて揺すると、おむつの具合もまた確かめてみせた。
「うーん、出てないね。そらそら、どうしたー。ミルクかなー」
その面持ちへ滲むのはすでに「母は強し」の文字だ。
「いやいや。地下の外田から勧められて相談に来ましたって言ってもらえれば、署でスムーズに対応してもらえるくらいはやれてるよ」
見せつけられた一面に、つくづく時が流れたことを感じ取る。
赤ん坊を肩もたせかけたあすかが顔を上げていた。そのとき向けられた視線に固さは確かとあり、しかしながら明かさぬままあすかは浮かべた笑いで覆う。
「あ、は。でもそんなことが起きたら大変。来年ね、久しぶりに同窓会をやろうって話が出てるみたいよ」
同時に跳ねて赤ん坊を抱えなおすと、ストラヴィンスキーへこうも教えた。
「そろそろ転勤や結婚で前ほど集まれなくなってきてるから最後に、って。顔、見せてくれたらみんなも喜ぶと思うんだけれど」
確かに今なら遠慮なく出向けそうだと思えていた。むしろクビにされた後のことを考えるなら、人脈作りにいそしんでおいても間違いないのではないか、とすら思ってみる。

「来年なら行けるかもしれないな」
「じゃ決まり。携帯のアドレス、交換しておかない？　決まったら知らせる」
　言うや否やバギーに提げられていたカバンから、赤ん坊片手に器用と携帯電話を掴み出してみせた。
「ああ、了解、了解」
　ストラヴィンスキーも尻ポケットへ手を回す。私用のそれを抜き出すと、圧倒的に使用頻度の低いその操作にまごつきながら交換に備えた。
「あれ、ん」
　だがあすかはといえば取り出した携帯の画面をつっつき格闘したままだ。
「え、開かない」
　自分の携帯電話なのに、である。
「あ、どうしようロックかな」
　うちにも当の携帯電話から呼び出し音は鳴る。
　急ぎ耳へあてがうあすかの背が向けられていた。向こう側でかわされる会話は小声でよく聞き取れない。ただ頭を下げるような仕草で揺れる背中を眺め続ける。かと思えば赤ん坊を肩に、あすかはあさっての方へと身をよじった。つられたようにストラヴィンスキー

もそちらへ目をやる。
白いツーリングワゴンだ。
ウインカーを点滅させると近づいていた。スピードに否応なく感じ取るものがあるとすれば、それは全くもって職業柄というヤツだろう。その通りとワゴンは真横で荒々しくブレーキを踏み、中から男は現れていた。ノリの利いたシャツに、きっちり撫でつけられた髪。メタルフレームの眼鏡が、絵にかいたような銀行員風な人物だ。だが銀行員であればこそ忙しい時間帯なのだから、受けた印象に違和感は過った。たずさえ風でも巻き起こしそうな勢いで、かまわず男はあすかの元へ駆け寄ってくる。
「何してるんだ。帰らなきゃだめだろ」
開口一番、投げつけそれからストラヴィンスキーへ口を開いていた。
「失礼ですがどちら様ですか。妻に何か用が」
なるほど。
思うからこそ笑みは浮かぶ。
「あ、初めまして。あすかさんの高校時代の友人の外田と言います」
軽く頭を下げて名乗り、通りかかったところで、と口にしかけた。
「たまたまさっきばったり会ったの。へいちゃん、夫の浩紀」

ところで、あすかに先を奪われる。おかげで「初めまして」という浩紀の一礼こそ今さらとなっていた。のみならず「さあ行こう」で早くも立ち去る意を示した浩紀に早くも、軽く無視されてみる。

「温大も泣いてるじゃないか。見ての通りなので、ここで失礼させていただきます」

「いえ、こちらこそ……」

言い切る間もない。きびすは返され、あすかが「ごめんなさい」を繰り返していた。その背を押すように肩を抱いた浩紀にあすかが足を絡ませたなら、思わずストラヴィンスキーは呼び止めかけて吸い込んだ息を吐き出す。

何しろ民事は不介入が原則だ。所属部署が部署なら、なおさらだった。

連絡先の交換どころか別れのあいさつすらなおざりとなっている。

ただ、残る思いを次の思考へ回していた。

前でバギーから赤ん坊の納まるソケットだけを抜き取った浩紀は、後部座席へ固定すると残りをトランクへ放り込んでいる。助手席へ押し込まれたに等しいあすかはそこへ赤ん坊を寝かせると、急ぎシートベルトを体へ巻き付けていた。

顔がちらり、申し訳なさそうにストラヴィンスキーをとらえる。

だとして挙げ返した手は控えめにならざるを得ない。

やがてツーリングワゴンは走り出す。
そのナンバープレートをもう一度、目に焼き付けてストラヴィンスキーはオフィスへ向かい歩きだしていた。

「まだ早いんじゃないのぉ」
丸テーブルのマグを片付け始めたハートこと、バジル・ハートに落ち着きはない。振り返ってハナも冷やかし半分、投げかける。
「見てみろ、もう三十分を切った。今日は自転車を教える約束があるからな。遅れると本人にもジルにもどやされる。ダブルパンチでかなわん」
「SO WHAT」対応部署、通称「CCT」オフィス内のオペレーティングルームは閑散としたものだ。かつては最大六人が詰めていたオペレーターに、それだけの業務量も失せると、昨晩から続いた正午までのシフトも実質ハナとハートにオペレーターの三人だけでこなしている。それは心なしか空調も効きすぎているように感じられるほど味気ない有様だった。
「あー、やだやだ。その幸せ自慢。グッドファーザー賞でも謹んで差し上げましょうか」

だからして空き放題の座席の中、今日もハナは好きなデスクを占拠して、ＡＩが拾い上げてきたワードをチェックしつつ声を上げる。残念ながらと言うべきか。連なる文脈にはこれまた警戒すべきものがない。仕事はその傍らへデジタル印を押すだけでまた終わっていた。

「その前にグッドハズバンド賞こそもらわんと割が合わん。すぐ戻る。ストラヴィンスキーとオツが交代に降りて来たなら待たせておけ」

指差し言うハートの手には父の日のプレゼントと、クレヨン画の似顔絵がバスキアさながらプリントされたマグカップが握られていた。

「わあ、加えてごちそうさまでした。ってこれ、四人でしなきゃならないほどの引継ぎ内容？　大丈夫、あの二人なら十二時ちょうどに降りて来るわよ。最近みんなダルダルにたるんでいるんだから」

なおさらハナは身震いし、聞かぬハートは変わらぬタンクトップ姿でいそいそと、トイレ脇の給湯室へ去ってゆく。

「せめて聞いて行って」

しかしそうも貫く理由がファッションでないことを知ったのは、つい最近のことだろう。爆発物対応班での研修時だったらしい。実際はその班を支援するための海外研修だっというが、車両底部に仕掛けられた設定での解除演習中、袖口を引っ掛けまさかのタイムロス。

処理に失敗したことがきっかけとなったらしかった。確かに現場であれば取り返しがつかない大失態で、見ての通りのマイホームパパだ。家族のためにもそう簡単には吹き飛ぶわけにゆかないことから、戒めも兼ねてスタイルは定着することになったらしかった。

オペレーティングルームのガラス向こう、廊下にあったその姿もやがて見切れる。見送りハナは仕方なく、椅子を軋ませモニターへと向きなおった。

そんなハナも同様にウキウキ退散の準備に取り掛かれたなら文句はないが、続く「独り身」に変わりこそない。どうにも持ち上がらない尻で最大限、帰る準備を整えると、まとめていた髪をただほどいてすいた。

「だって女はガッツリ休まなきゃ、子供だって持てないものねぇ」

「そういえば常盤さん、聞いてますか？」

と、少し離れた位置から声は投げかけられる。昨晩から同じシフトについていたオペレーターだ。ＡＩを補助に各署への入電を監視していたようだが、やはり物足りない様子だった。

「ん、何のこと」

ハナもまたワードのチェックに戻ると唇を弾く。

「今やってる予算委員会でオフィスの吸収合併が決まるんじゃないか、って話です」

「ああ。それねぇ」
そう、こちらも芳しくない話だろう。とはいえ自身にもかかわる事なら、放っておけはしなかった。
「最近、チーフもこっちへは顔を出さなくなってきたし。そのことで上とやりあってるんじゃないかって。日本ってそもそも当初から事件数が少なかったわけだし。ま、ナイロンを挙げたから今でも体制が維持されてるだけで、そっちもそろそろ法的に決着がつくってハナシだから、しょうがない成り行きといえば成り行きよねぇ」
そうして引き上げられてきたワードはやはり、目を通せば通すほど不穏な企みとは程遠かった。
「そうなると、そっちもいろいろ不透明なんじゃない？」
いい加減、目も疲れてきている。最後に椅子の上でめいっぱい伸びを繰り出し、肩を揉むついでだ。チラリ、時刻もまた盗み見た。
十一時四五分。
こうしては人生は浪費されてゆくのだろう。
大げさにでも考えていないと、大事な部分がサビ付いてしまいそうでならない。
「まあ、自分は自衛官上がりなので」

「ああそっか。そういえば曽我さんも、だったわよね」
　などと、どこか申し訳なさげに言うオペレーターの言わんとしていることは、自分には帰る場所がある、だろう。
「じゃあオツさんは航空会社へ戻るのかしら。レフはロシア？　それとも奥さんのこともあるから案外、アメリカだったりするのかも。ハートは元々機動隊からの出向だし。いずれにせよみんなバラバラってところね」
　じんじん熱を帯びてきた肩を仕上げに大きく回し、その勢いを借りて床を蹴り出しデスク前から椅子を後ろへ滑らせる。
「常盤さんは地上の公安へ、ですか？」
　それはどうだろう。
　いくらか軽くなった体でハナは思い巡らせた。
「あたしとストラヴィンスキーは合併先に配属、って流れこそないと思う。ここの詳細はチーフが把握しているし、守秘義務は一生付きまとうわけだけど経費削減が目的なら普通は切られるかヒラに逆戻りが相当よね」
　などと話は半ば冗談だったが、残り半分はかなりの信ぴょう性を帯びていた。
「なんだか報われない話ですね」

「あら、組織に生きる軍人がそれ言っちゃマズいんじゃない」
「みなさんのご尽力は存じ上げておりますので」
「平素からのバックアップ、心より感謝いたしております」
憂うオペレーターが目礼する。様子にハナも調子を合わせていた。そうして互いは控えめに笑い合う。
「ここ、性にあってたんだけどなぁ」
つまり他では合わなかった、ということになるのだが、ほじくり返す利などない。ハナはシステムからログアウトを済ませる。雑談を繰り出していたオペレーターの姿勢が、やおら前屈みと崩れたことにつきかけていたため息を飲み込んだ。
案の定だ。
言葉はこう告げられる。
「入電ありました」
同時にヘッドセットのマイクをつまんだオペレーターは、角度を調整しなおしていた。だとして今さら慌てふためく道理こそありはしない。むしろ長らく緩んでいた何かがカチリ、かみ合う音を内から聞いて、ハナは椅子から立ち上がる。デスクに放り出していた端末を手に取ると、イヤホンを繋いでコードを首へ回し掛けながらオペレーターの傍らへ

と歩み寄っていった。
「はいはい、それで何事かしら」
そのとき廊下へ、身支度ついでに帰るコールのひとつでも入れていたに違いないハートは戻って来る。
「遅いぞ。そら、引き継ぎを済ませたら帰るからな」
声は、これまたちょうどとおりてきたらしいエレベータへ向かい放たれていた。
「何言ってるんですか。まだ十分前ですよ。ハートがせっかちなだけなんじゃないですか」
返すそれはストラヴィンスキーで間違いなく、だとしてオペレーター―の動きが鈍ることはない。かつてと変わらぬ段取りで別室の曽我へ一報、入れると、送られてきた情報を端末への送信に備え、打ち出していった。
のぞきこん一足お先だ。ハナは概要へ目を通してゆく。顔を、言い合うハートとストラヴィンスキーへと向けなおした。
「そこまでっ。ＳＯ　ＷＨＡＴ　がらみの一一〇番があったわよ」
押し合いへし合い、オペレーティングルームへ足を踏み入れていた二人の動きはそこで止まる。

火を止める。
食卓で震える端末を掴み上げた。
内容へと目を通し、レフ・アーベンは台所を抜け出す。
オフィスから徒歩で一時間足らずの自宅は以前と変わらぬ純和風家屋だ。見るからに外国人が住まいしているせいで警戒していた周囲も今ではすっかり慣れた様子で、「チョウカイ」へ費用を払うようにさえなっていた。おかげで組み入ることとなった共同体(ソユーズ)では「オトナリサン」と呼ばれ、時に奉仕へ参加している。
そんな日々はいささか体重が増えるほどに平凡だ。
繰り返す中で変わりつつあることがあるとすれば、これくらいか。
寝室にあてがった和室のふすまを滑らせる。
「呼び出しが入った。今から行ってくる」
「ずいぶん、久しぶりじゃないの？」
オリエンタルテイストだとチョイスした本人は鼻高々らしい。竹が組まれたサイドボードに赤茶けた色合いのラグは確かに和風モダンと悪くなかった。その窓から入る光をレースのカーテンは淡く遮り、照らし出されてバーバラはベッドの上でみじろぎする。

「キッチンにカーシャがある。ミルクは好きに足してくれ」
「ありがとう。そうする」
重たげと身を起こしたその傍らへ腰を下ろした。
「行ってきて。洗濯ならしておくから」
「いや、もう干した」
送り出すバーバラと唇を重ねてその後、教える。
「じゃあ、掃除くらいはね」
それでも足先から毛布を払った手は、ヘアゴムを探してサイドテーブルへ伸ばされた。
「終わった。玄関は昨日、済ませている」
聞きながら「あらそうなの？」と髪を束ねてみせる。
「でも今日はゴミの日だったでしょ」
だがハイライトの分別にこそ手抜かりはないだろう。
「出せるよう、もうまとめた。出るついでに持って行く」
ならバーバラはこちらへ向きなおる。
「何か残して」
不満げな目が見つめていた。

「誰でもできる。お前がする必要はない」
言って聞かせ、代りにこちらが立ち上がる。少し離れた位置に転がる携帯電話を、手前へ引き寄せなおしてやった。
「何かあったらすぐ連絡しろ」
「もちろん」
「ドアの鍵を忘れるな」
などと、おそらくもう心配はいらないだろうがこれも習慣だ。
「大丈夫よ。言ったでしょ、今日はジルが来るって」
そう、ジルとは同僚、バジル・ハートのパートナーだ。あの外見で日本人だというハートの第一言語はだからして日本語で、見た目とのギャップを埋めるべく十代で米国へ語学留学したさい通ったハイスクールで出会ったという。
まつわる話はもう自分のことかと話せるほどに聞かされ続けており、ゆえにジルの人柄もまた折り紙付きだった。肩書だけが保証の、素性の知れぬ相手を招き入れるよりはるかに安心できる人物だと承知している。
「あとひと踏ん張りなの」
バーバラも頼りにすると、何かと日々のことで相談しているらしい。

「ほどほどがいい」

それでもどこか落ち着けない。言う顔へ、今度はこちらから屈み込んでやる。

部屋を後にした。

「SO WHAT」の名が使用された。しかも単なるネット上の書き込みや、メールの危なげなやりとりが露見してのことではない。名乗る者からの怪文書が通報されたという。それは武力供与を行っていたジェット・ブラック確保以降、初めての案件でもあった。

事態に過るものがあるとすればこの期に及んで見落としていた火種があったのではないか、というものだ。確かにこの半年余り、オフィスの緊張感も薄らぐとせいぜい実行力を持たぬ予備軍ばかりを監視している。こちらの不手際を突き付けられているかのようで、妙な胸騒ぎだけがあった。

ジャケットを引っ掛け自宅を後にする。

ゴミを通り向かいの指定場所へ出した。

日常のテロリストはといえばカラスの方が喫緊だ。突っつき中身を引き出す彼らは地味な外見に反して破廉恥極まりなく、防いでかけるネットにも念が入る。

そもそも故郷のクバルチーラ、アパートでは分別どころか一切合切をダクトへ放り込むだけの簡素さで、知らず損じた初回など、目にした惨事に血の気が引いた。

恐れて仕上がりを確かめるうちにも同じくゴミ袋を手にした「チョウナイ」の婦人は現れる。そんな彼女はいまだこちらをアメリカ人だと勘違いしているらしい。「ありがとうございます」といくら日本語で返そうとも、いまだ「ユーアーウェルカムよ」と言っていた。

憐れまれているのか。世話を焼きたがる彼女に後を任せて先を急ぐ。

途中、向かいからタクシーが現れたなら止めて乗り込んだ。

たいていの運転手は病院の名を告げると正面のロータリーへ車を回したがる。ゆえに手前へ差し掛かったところで裏へ誘導し、降りた。

連絡が入ってからおよそ三十分だ。駐車スペース「１０６」からエレベータでオフィスへ降りたならガラス張りと広がるオペレーティングルームに集まる面子は見え、そちらへと靴先を切り返した。

「内容は？」

声に赤いスーツの曽我を始め、ハナにハート、ストラヴィンスキー、乙部が丸テーブル前から振り返る。

「そろったわね」

にもかかわらずオペレーターは一人態勢のままらしい。それもこれもこのところの手持無沙汰に余剰人員を切ったせいだ。チーフ百合草も不在なら、体制はどこか頼りなくも見

えていた。
「チーフには報告済。知ってると思うけれど、予算会議で抜けられない状況よ。戻ってくる予定ではあるけれど、それまでは私が指揮をとるよう一任された。よろしく」
開口一番、伝える曽我も、おそらくその辺りのことへ配慮している。
「オイ。そっちへ今日、ジルが行くとか言っていたぞ」
合間、ハートが小声で確かめていた。
「知っている」
「そうか」
返すうちにも詳細を、足を踏み変えた曽我は話し始める。それによると本日、午前十時五十分ごろ、ＳＯ　ＷＨＡＴ　の名で脅迫ともとれる文書が届けられたらしい。場所は国際新ホール。そこで今日、行われる午後十九時開始のファッションショー『ＧＫ　アップデートコレクション』をターゲットにしているらしい、とのことだった。
「大きいな」
呟くハートが隣で腕を組んでいた。
見上げた正面モニターへもホームページは呼び出されて、ホール外観と客席見取り図が映し出される。

その形はドームにもにた椀型だった。政令都市の河川沿いに建てられると、一階、二階と客席を円形に積み上げている。その収容客数は最大で二万五千。ゆえにスポーツの国際大会や国内外のコンサートに使用されることが多く、全国屈指の大規模施設だということだった。

「時間が差し迫っているわりにはね」

うなずき返す曽我がオペレーターへ視線を投げる。

「文書のＰＤＦ、出してもらえる」

以前なら端末へ送られていた資料は人手不足のせいだ、間もなくホール画像の上へと重ねられていた。

端に打たれたメモリから、文書の大きさはＡ４サイズだと読み取れる。見る限りありきたりなそれはコピー用紙で、乱雑に折りたたまれた跡も見受けられた。文字はその中央に、短くこう印字されている。

ジェンキングはニセモノ　ランウェイは炎上

ＳＯ　ＷＨＡＴ

「えっと、このジェンキング、って言うのは何なんでしょうか」
眼鏡のブリッジを押し上げたストラヴィンスキーが早々、確かめていた。つながらずこちらも続き、問いかける。
「飛行場を攻撃するつもりなのか？」
なら「まさか」と声を上げたのはハナだった。
「ランウェイはファッションショーで使われる花道のことよ」
教えたその後を曽我も引き継ぎ言う。
「ジェンキングは彼、動画サイト配信者の名前」
なら文書を脇に寄せてモニターに、その顔は映し出されていた。
正式な名称は、ジェンダー・キング。
本名、石田一馬。男。二十五歳。
若者に人気のアパレルブランドでのカリスマ店員を経て、動画配信を始めた人物だという。動画で掲げる「ファッションで広げるジェンダーを越えた世界」というキャッチフレーズは引き続き若者の関心を集めると、男女格差を埋めるアイコンとしてチャンネルに三百万人余りのファンを持つ人物だった。
合わせて流された動画では、ショートボブの髪をオレンジに染めたジェンキングが、空

色に花柄が舞うスポーティーなジャージ姿で笑みを浮かべている。ごく自然だったが丁寧にほどこされた化粧は、線の細さもあいまるとまるでボーイッシュな女性で、確かに性別を超えた魅力を見る者へと放っていた。

「男だから、女だからこうあるべきっていう制約とか、差別にハラスメントなんかのお悩み相談がよくて、なんだかつい見ちゃうのよね」

などとしみじみこぼすハナへは、思わず誰もが振り返える。

「なんだ。ここも改善の余地ありか」

代表して確かめるハートの面持ちこそ複雑だった。

「まさか。けど色々ね」

などと「GK　アップデートコレクション」はそんなジェンキングが企画した、初のジェンダーファッションイベントだ。観客は抽選で選ばれた十代後半から二十代の男女が一万八千人。登壇するモデルも男女合わせて六十人が視聴者から抽選で選ばれると、スタッフを入れた二万人弱が今夕にはホールにあふれる予定となっていた。

そんな会場で発見された文書は、午前十時の電話による問い合わせがきっかけだ。三日前、同ホールで行われた音楽イベントを訪れた際、財布を落としてしまったかもしれないので、指示する番号の座席を確かめてほしい、というものだった。

対応したのは楽屋口の受付係で、最初、確かめに向かうまでもなく「ない」と返している。なぜならホールはイベント終了直後に清掃が入ったうえ、翌日の昼には今日のショーに合わせて座席の配置も変更されており、並行して設営も急ピッチと進められていたならいまだ放置されているとは思えなかったからだった。だが電話口の相手はどうしても、と食い下がり、渋々向かったところでまったく別の位置へ移動した座席の、跳ね上げられた座面に文書を見つけている。

ふまえて曽我が問題視したのは、相手は名乗る通り実行力を持った　ＳＯ　ＷＨＡＴであるのか、それとも名を語るだけの愉快犯なのか、がひとつ。もうひとつはどちらだろうと公には伏せられているこの名称をどこで知り、どういう意図をもって使用したのかだ。万が一にもソレが何であるのかを知らず、ただ雰囲気で利用しただけのイタズラだったとして、参照された方こそホンモノだった、こそ見逃せない。

地元警察はすでに現場へ到着しているという。

明らかにすべく容疑者確保が必須なら、乙部が操縦かんを握るヘリで現場へ向かう。一時間足らずでホール真横に建つホテル、その屋上に描かれた「Ｈ」の文字へヘリはその脚を柔らかとつけていた。

「折り返すため控えていた相手の電話番号はデタラメ。住所は隣接する市の金物工場、しか

も持ち主は売却に出している不動産会社だった。そのとき名乗ったアイダツバサ、という名前についても主催者側は心当たりがないとのことよ」

タッチアンドゴーで飛び立つ予定にあるローターが、頭上で回転を続けている。

だからしてホバリングと、手足の離せない乙部は振り返っただけで降りる準備が整ったことを伝えていた。

応じてストラヴィンスキーがドアを開け放つ。丸めた体で吹き荒れる風の中へと飛び出していった。

「ホールは現在、所轄が不審物を捜索、文書からの指紋採取を実施中。連携してこちらも監視カメラと通話記録の分析を進めてる。ただ開場までに、いずれから決定打が出せるかどうかは微妙よ。最善をとって主催者側へは先ほどショーの中止も申し出た。けれど明白な危険の提示がない限り断られてる」

間も吐き出し続ける曽我へは仕方ない、としか言いようがない。主催者にＳＯＷＨＡＴの認識がない以上、文書の文言でショーを中止することは損害が大きすぎた。

「加えてショーへ影響がでないよう、捜査は内密に進めてほしいと抗議もきてる」

「なんだと？」

ストラヴィンスキーに続き機を降りたハートが頬を歪ませている。ドアの上部へ手をか

けこちらも続けば、曽我はこう返していた。
「こじらせてこれ以上、やりにくくしたくない」
　あえて強く出ないのは、騒ぎ立ててのカラ振りが今、存続が危ぶまれている部署にとって一番、マズイと考えているからだろう。
「各自、あからさまな行動は控えるよう心掛けて取り掛かって」
「考えられんな」
「哨戒よろし、くっ」
　ならハナが最後に降りたヘリのドアを投げ飛ばすように閉めてみせた。
　確認してふわり、ヘリはコンクリートから足を浮かせる。いっときホバリングしたかと思うと風を巻き付け一気に高く舞い上がった。上空で倒された機体はやがて、大きな弧を描いて右旋回。空へ吸い込まれるように遠のいてゆく。
「以上から、容疑者確保のための優先順位を以下におく」
　そうして風の止んだヘリポートは、ただ四方に空を広げるのみとなっていた。
「中止につながる要因の発見を最優先に、なされなかった場合、ショー警備へシフト。プランは現場の意見を優先。容疑者特定に関しては監視カメラと通話の線からこちらで進めるわ。出来次第、確保に向かうことを念頭においておいて」

と、やおらストラヴィンスキーが頭を下げる。
「恐れ入りますっ」
視線の先には完璧な仕草で階下へ促し、鉄扉を開けて待つホテルマンが立っていた。
「まったく忙しいな」
唸るハートへすかさず、所轄へ現場到着を知らせたとオペレーターは告げ、担当の諸見沢警部と落ち合うよう、楽屋口へ回る指示は出される。最後に通信は切れていた。
確かめレフは腕の時計へ視線を落とす。
「運が良ければ容疑者の方からやって来るだけだ」
開場まであと四時間余りだ。言えばハートが何とも言えない面持ちで振り返ってみせていた。
「お前の運がどうなっているのかは知らんがな、その運は悪い方だ」
言った。
ホームページで確かめた通り、片道二車線の道路を挟んだ向かいで川をバックにホールは建てられていた。まだ前の広場に人影はなく、イベントののぼりだけが風を受けてエントランスへ導きたなびいている。用がないなら回り込み、表の装飾に全予算を吸い取られたような楽屋口へ足を踏み入れた。

そこで到着を受け、待っていたのは制服警官だ。
案内で諸見沢の元へ急ぐ。
そんなここもバックヤードはイベント施設特有の雑さにまみれていた。作りは狭く、薄暗く、スタッフもお揃いの黒いスタッフジャンパーを着こむと、ショーを前に慌ただしく行き交っている。
だからして奪われていた色味が取り戻されたのは、一枚、鉄扉を潜り抜けてからだった。ホール後方、三分の一辺りか。関係者入り口を抜け出たとたん、天井からのライトに照らし出されて会場が、閉所だが果てなく開かれた空間として明々と、誰もの目に飛び込んでくる。
ストライプと並べ置かれた座席がアリーナで、無人だからこそ圧倒的物量を見せつけていた。その前方には屏風よろしく三枚、動画スクリーンを立てたステージが組み上げられている。花道、ランウェイはそこから客席を割ると長く前方へ伸び、闊歩するモデルを照らし出すのだろう、両側に照明をいくつも据え置いていた。
それら全ては黒一色だ。
引き立てられて七色のバルーンとリボンは、会場全体にたっぷり飾り付けられている。まさに幻想世界かと、空調にわずか揺れ動いていた。

光景を一階中央に、取り囲む形で二階にもひな壇状の客席は設けられている。すり鉢状の全体は見回すほど不特定多数のただ中へステージを据え置く恰好を強調し、誰もの脳裏に「ランウェイは炎上する」の文言を強く意識させた。
「警部、公安のかたが到着されました」
声に、ランウェイの下で立っていた人物は振り返る。諸見沢らしい。作業服にも似たジャンパーの前を開いて警察手帳は取り出されると、代表してストラヴィンスキーが自身のそれを示し返した。
「公安の外田と言います。このたびはご協力に感謝いたします」
おっつけ背後のそれぞれもまた紹介してゆけば、「お疲れ様です」と一礼した諸見沢は、ホール内外の安全確保を進めているところだと、さっそく話し始めていた。
「何も出なければ移る警備に備えて態勢も組み上げ中です」
五十代が多いこの役職においてそんな諸見沢は珍しく若い。
「状況は移動中にも。文書の置かれたタイミングが設営のただ中だったということで、場所が場所ですし、容疑者は内部関係者の可能性が高いと考えているのですが」
指先で身分証を戻しつつストラヴィンスキーも、親近感を覚えるその顔に返す。躊躇なくうなずいた諸見沢とは、やはり話が合いそうだった。

「監視カメラの方もその可能性を中心に。劇場関係者の方も含め、確認を進めています」
「お任せするとして」
　思わず漏れる笑みは本音からだ。そうして会話へ一息、入れる。
「文言通りを警戒するなら、この辺りが最も厄介なそうだなと。取り急ぎ、こちらでバックヤード、スタッフ方の楽屋を確かめさせていただきたいんですが」
　持ちかけた。
　つまり顔つなぎは済んだと認識したらしい。背で待ちかねていたようにハートが「ようし」と声を張る。
「中は野郎ばかりだとやりにくいだろう。こっちは外周りと合流するぞ」
　レフへ目配せすると動き出した。確かに男女が入り混じったファッションショーの舞台裏である。配慮へ感謝、と軽く手を挙げ、ハナも見送る。
「そのつもりでご紹介しておこうと、ジェンキングさんにこちらへ来ていただくよう、お願いしていたんですが。どうも忙しいようで」
　かまわず話した諸見沢は、そうしてまいったな、と言わんばかりジェンキングを探すと頭を振った。
「どうする？」

見て取りハナも口をすぼめる。だとして言わんとしていることは単純だ。そして交渉こそストラヴィンスキーの役回りだった。

「そこをなんとか。時間もないので」

現場監督とのすり合わせもさることながら、被害者であり協力者であるところの当事者との円滑な関係を省いて、潤滑に進む道理はこそない。

なら考えこんだ諸見沢の手は、やがて腰に提げていた無線へと伸びる。押し込んだボタンで二、三度、手短に指示を吹き込むと「自分が一緒ならいいでしょう」と動き出していた。

引き連れられてステージ袖の鉄扉をくぐり抜けてバックヤードへ戻る。卍を描くように伸びる通路をなぞると、いまだトラックが横付けされたままの搬入口へ出た。そのシャッターは上げられたままで、監視カメラは両脇の見上げた位置に据えつけられていることを確かめる。角度に死角はなく、直接、舞台へ荷を運び入れられる搬入用のエレベータを真向かいに、右手側に大きく窪んだゴミ置き場のスペースを捉えていた。そこで圧縮ドラムは今も、ゆったりドラムを回転させている。

ちらほら出入りするスタッフに、カートを押して現れた清掃員とすれ違いながら、そんなゴミ置き場のスペースと対称の位置にある、壁の中へもぐりこんでゆくように設えられた階段室へと足を運んだ。

おおよそ非常用と思しきそこは人がすれ違えるかどうかの幅で狭く、二階を越えて伸びるまま、照明の操作室前に抜け出す。観光地に置かれた望遠鏡のようなスポットライトの傍らをやり過ごし、操作盤の前で最後の調整を行う技術者たちを横目にしながら電源の管理室へと向かった。空調や常灯を管理するそこは至って事務所風と、グレーの作業着を着こんだ中高年の職員が数名、常駐している。会場全体が見渡せるような位置に陣取ったせいもあり、事務所はホールの天井が間近と迫る場所でもあった。おかげでいつしか足元になっていた二階客席さえ見下ろしつつ回り込んで、山麓のつり橋にも似たキャットウォークへ出てゆく。渡るにあたってハーネスは必要ない様子で、手すりはそうまで高く取り付けられると、ステージの上手から下手へと、まさに空中散歩とホール全体を見回しながら移動していった。バックヤードもまた左右対称に作られているのか。同じく現れたあの狭い階段室からステージを挟んだ反対側の一階へと降りる。

いずれの場所も無人、ということはなかった。むしろどこも最後の追い込みと、気心の知れたチームワークを発揮している。様子にはさなか、部外者こそ紛れ込むに目立ち過ぎ、つまりこの中の誰かが文書を座席へ忍ばせた、という見立てで間違いないと思えた。

最後、戻った地上で諸見沢に引き連れられ、モデルたちが詰める更衣室へ向かう。とたん圧倒どころか弾き出されそうになり、ストラヴィンスキーとハナは目を瞬かせていた。

まるでショールームだ。通路には延々、ラックに掛けられた衣装やアクセサリーが、バックに帽子に靴が、おもちゃ箱をひっくり返したような色と形で並べ置かれている。おかげ狭い通路はさらに狭められるとスタッフが、奇抜な恰好のモデルが、押し込まれたかのようにそこを行き交っていた。

混じればもはや祭りの夜だ。果たして屋台の間をかいくぐるようなあんばいで、身を擦りつつ反転を繰り返しながら進む。どうにか三人は、男性用の更衣室へ辿り着いていた。

そう、ショーは男女混合で行われるうえ素人も多く起用されていることから今回、通常一か所にまとめられているそれは、ステージ左右のリハーサル室と会議室に振り分けられている。中ではこうこうと光を放つ鏡が壁際を覆い、前でＦ１のピットさながら美容スタッフが髪に爪に顔に、腰掛けたモデルへメイクをほどこしていた。仕上がったモデルたちはといえば空いた場所で着替えを行うという混沌さで、終われば水槽を気ままに泳ぐ熱帯魚かと時間までを思い思いに過ごしている。光景はハロウィンか仮面舞踏会か。いやそれ以上に華やかで独創的な世界をそこに濃縮させていた。

「これ、めちゃくちゃマズいわね」

ステージを挟んで向こう、女子の更衣室はこのあと一人で見に行くとして、両の腕を深く絡めたハナが壁際でこぼす。

「これなら紛れ放題、燃やし放題、ってところですか」
本来ならあれやこれやと確かめて回りたいところだが、表立ってを禁じられていたなら大人しく眺めるほかない。ストラヴィンスキーも神妙と唸って返す。
「公演が始まれば、さらにとんでもないことになるだろうし」
「わお。そうなんですか」
言うハナへはともかく、驚いておかねばならないだろう。
「廊下の衣装。全部、着るんでしょ？」
ナルホドと、諸見沢も傍らでうなずいていた。
「監視カメラの確認、終了しました」
と、声はイヤホンからだ。早い決着はチェック範囲が四十時間足らずと、狭かったせいだろう。
「受付担当者、主催者に立ち合いいただきましたが、直近コンサート終了後、楽屋口、搬入口、共にカメラへ不審者の映り込みはみられません。ホール内のカメラにおいては該当の座席付近は映っておらず。周囲の確認のみですが、こちらも不審者の映り込みはなしです」
そりゃあ関係者なら、拾い出されることはないだろう。結果を諸見沢とも共有した。
どうにも手の付けられない更衣室をそうしていったん離れる。混雑を抜けて設えられた

ステージへ出たところで、イヤホンからまた別の声に呼び止められていた。
「ハナ、ストラヴィンスキー、どこだ」
ハートだ。
「もうすぐ中へ戻る」
もうそんな時間か、とのぞき込んだ時計は確かに、開場三時間前を指そうとしている。早いな、とストラヴィンスキーは視線を持ち上げ、一階客席のはるか後方、ホール入場口から次々警官らが流れ込んで来るのを見た。ままに客席へ散開してゆく彼らは開場前にどうにかここと二階を捜索し終えたい様子だ。中にハートとレフを見つけたところで、向かって大きく手を振り上げた。
「今のところ外に問題はないな。このままショーを始めるつもりでいるなら、だ」
目にして駆け寄ってきたハートがステージへよじ登る。作業を進めている間も、通信からもれる状況もまた追っていたならその目を諸見沢へと向けた。
「ゴミ箱は撤去。外周の警備と入場口の持ち物検査だ。ホール側が手配している業者はアテにならん。所轄の方で代行してもらえるか」
レフもまた飛び上がったランウェイを走ると輪に加わっている。
あった用意にゴーサインを出すべく、うなずき返した諸見沢がすぐにもトランシーバー

へ手をかけていた。見て取りハートはストラヴィンスキーへも言う。
「そっちはどうなっている。カメラに不審者の映り込みはなかったと聞いたぞ」
「の、ようですね」と切り出してストラヴィンスキーは、見てきたままを明かしていった。
「にもかかわらず楽屋の方はかなり問題アリです。人の出入りがランダム過ぎて誰が何をやっていようと気付けない具合でした。内部関係者でランウェイの妨害。文言通りなら警戒すべきはますますあっち、ってことになりそうです」
頭で更衣室の方を指し示して締めくくる。
「容疑者の割り出しはどこまで進んでいる？」
間髪入れず、レフがマイクへ吹き込みオフィスへ確かめた。なら返したのは、トランシーバー越しのやり取りの合間を縫って振り向いた諸見沢だ。
「監視カメラ以外はまだ。スタッフとモデルの身元確認もそちらと協力。処理中ですが五百人いますからね。照合できたのはまだ半分ほどかと」
「アイダツバサの通話記録の開示は裁判所の令状待ちです」
聞こえていたように、イヤホンからオペレーターも付け加える。
「裁判所には急ぎで対応を願い出ていますが、まだ二、三時間、かかる見込みです」
つまりこの様子では容疑者の特定に至る前にだ。ショーは始まってしまいそうだった。

「ごめんなさい」
聞き慣れない声はそうして、頭を寄せる一同へ掛けられる。
誰もが振り返っていた。
「最終の打ち合わせが長引いてしまって」
だとして二時間近くの遅刻は大物にもホドがあるだろう。宙に浮いたような厚底のスニーカーと、襟を抜いたスパンコールも眩しいスカジャン。ダメージ加工のスキニーデニムがスタイリッシュと見えてしまう着こなしが不思議でならない。ステージ袖からジェンキングは現れていた。
そんなジェンキングはもう次に、諸見沢さんでしたね、と知った顔を見つけて捕まえていただけたんですか、と確かめている。まだ捜査中だ、と諸見沢が答えたなら逸らした目でようやく、並ぶ面々をいぶかし気と見回していった。
「こちら、本件へ特別に配属された捜査員のみなさんです」
気づき紹介する諸見沢のはぐらかし方は絶妙だ。知って無下にはできないとジェンキングも会釈を繰り出す。そちらの方も？　とハナへ問うた。
始終物腰は、動画のそれがキャラクター用であることを証明して落ち着いていた。厚底のせいもあって画面から伝わることのなかった背丈も想像以上だったなら、派手だと思え

た髪色も挿し色と、奇抜なだけに終わらぬオーラをカリスマと確かにまとっている。
「ご紹介と、今後のことでお伝えしておきたいことがありまして」
　などと興味を引き付けなおして話を進める諸見沢はここでも巧みだった。
「今後？」
　ジェンキングは振り返り、客席へ散らばる警官に気づいてさっ、と表情を変える。
「まさか、またただのイヤガラセに中止しろとおっしゃるんですか。準備にどれだけの時間とコストがかかっているか、ご存じでしょうか。今さら紙切れ一枚で中止になんてできません。それに楽しみにしているモデルのコたちへは何て？　ボクのファンにだってどう説明すれば。正直に脅迫状が送りつけられたと言えばいい、三百万のフォロワーを持つボクにそういうおつもりですか」
　さすがは動画配信者と言うべきか。迫真の抗議こそ立て板に水だった。
「このことは先ほどの方にも申し上げたはずです。それともまだ、ご理解いただけてないのでしたら、ボクはそんなに難しいことを言っているのでしょうか」
　つまり「さきほどの方」とは曽我に違いなく、ジェンキングを前にしたなら少なからず心の中で誰もは労をねぎらってみる。それもこれも　ＳＯ　ＷＨＡＴ　についてを明かせないなら、なおさらだった。

「いえいえジェンキングさん」
　くみ取ったかのように諸見沢が間に入る。
「イヤガラセかどうかは調査中です。つきましてはおっしゃる通り中止が難しいということですので、万が一に備えて公演中の警備についてをご了承いただきたいと……」
　とたん、え、とジェンキングの背は伸び上がっていた。マスカラののったまつ毛を見開き、囲う面々を見回してゆく。
「どういうことですか」
「ホール外周の警らと、入場口での持ち物検査をこちらで実施する。一階、二階客席へは私服警官の配置……」
「私服警官、ってこちらの方々が？」
　教えるハートを遮ってまで確かめた。
「演出の妨げになるようなことは控えますので」
　意味を察して諸見沢は付け足すが、なんの安心材料にもならないらしい。
「当然です。残念ですけどボクのショーにみなさんはデザインされていません。そもそもご遠慮、いただけないでしょうか。いいえ、こうして立ち入らせて大騒ぎ。それが相手の目的じゃないんでしょうか。イヤガラセで台無しにして、きっとボクが失敗するところを見

たがっているんです」
違いない、と自らの説になおのことうなずくジェンキングは口調を強めていった。
「だのにまんまと乗って警備だなんて大袈裟な。それがプロの方々の見立てなら、ちょっと信じられないんですけれど」
ぷんすか。
聞こえてきそうなほどに横目で睨むと、組んだ腕で唇を尖らせた。
おかげでせいせいできたらしい。
様子にむしろ誰もが呆気にとられていたなら、ジェンキングは一息ついてみせる。
「分かりました」
言った。
「どうぞ警備のほう、なさってください。ただし」
当てつけよろしく付け足しもする。嫌悪のこもった視線を並ぶ誰もへ這わせていった。
「その恰好で立たれると悪目立ちし過ぎますから、せめて座ってもらえるよう客席を追加させます。都合のいい場所を後でスタッフに申し付けて下さい」
気遣いのはずも毒が満ちるのは、なぜゆえに。
だとして懲りず、折れず、切り出す諸見沢は強者だといえた。

「後ですね、更衣室の方にも警備を布かせていただきたいのですが」
それこそあんぐり口を開け、ジェンキングは振り返ってみせていた。
「それはダメですっ」
顔面も蒼白と声を荒立てる。
「どう考えても目立ちます。スタッフやモデルのコたちになんて説明を？　危険から守るために？　バックステージの雰囲気はそのままステージへ出るんです。怯えたり不信感の残る顔でステージへ上がってショーが成功するとでも？　それこそ演出の妨げですっ」
「ですが文言にはランウェイ、とあります。一帯を手薄にはできません」
見てきたのだ。ハナもすかさず口を挟んでいた。
「何かあれば、それこそショーは目も当てられんぞ」
真顔とハートも脅しにかかる。
だがジェンキングはイタズラだ、と最後まで取り合わなかった。でないなら今頃どうにかなってますから、と最後には言ってのける。
「どうにか、とは？」
顔へとレフが、詰めていた眉の下から問いかけていた。見るからに外国人の容姿のせいだ。まさか日本語が飛び出すとは思っていなかったらしい。豆鉄砲でも食らったような顔

でしばしジェンキングは口ごもる。
「それ、は。有名人にはアンチがつきもの、ってことです。言葉一つでいちいち警備するというなら、ボクの日常は大統領並みです」
　ようやく返せたところで、なるほど、とストラヴィンスキーはうなずいていた。
「とにかく、あんなところに手紙を置いてゆけるなんてスタッフくらいでしょう？　とんだ給料泥棒を早く見つけ出していただければ、ぼくは十分ですから」
　それは　ＳＯ　ＷＨＡＴ　さえ絡んでいなければ、だろう。こうも危惧しているのはそのせいで、明かせないならうなずいた続きとストラヴィンスキーは呼びかける。
「でしたらジェンキングさん、あまっている衣装をお借りできませんか」
　言葉にはジェンキングより周囲が、え、と視線を向けていた。
「着込んで紛れたなら目立ちませんし、スタッフのみなさんにも説明する必要はないと思うんですが」
　苦肉の策だが周囲へ溶け込むための扮装は、張り込みなどでたびたび行うオーソドックスな手法だった。ビジネス街ならスーツ、繁華街ならカジュアルダウン。ファッションショーなら、その衣装、といったところだ。
「まさか、そんなものありません。全部、今日のステージのために用意したものです」

話にならない。
もういいでしょうか。
聞えてきそうな、それは面持ちだった。
「あら、それいいんじゃない？」
振り向かせてそのときハナは声を上げる。
「あたし、ついでに出るわよ」
言うまでもなくショーへだ。
「だって警備するなら、ここが一番いいポジションだし」
見て、と扇状に広がる客席もまた示してみせた。
なるほど、振り返れば確かに高い位置から眺めたホールは、自身を中心にあけすけと広がっている。観客からこちらの動きが丸見えなのは当然として、逆もしかりと見張るにうってつけだった。加えて万が一だ。ランウェイが有事となれば、誰より早く対応できる位置でもある。
ああ、と言わんばかりの空気が一同の間を流れていった。
「なら、男の方はどうするんだ」
投げるハートはすでに実行を前提としており、とたん互いの視線が互いを吟味し合う。

「か、勝手に決めないでいただけますっ？」
伸び上がったジェンキングがその視線を断ち切った。
「だいたい今回のモデル層は二十代なんですっ」
のみならず、数字だけでハナを一刀両断してみせる。それに、とレフへもまた目をやった。
「ただデカイだけじゃ、ボクの服は着こなせません」
続け様、季節感無視なうえにファッション性の欠片もない作業着もどきの二人へも向きなおる。
「日頃からファッションに無関心なのも、論外ですっ」
そうして目は、残るストラヴィンスキーへも据えなおされた。
だがしかし、だ。
あった勢いはそこでピタリ、途切れる。
「……なっ、にか？」
身構えてストラヴィンスキーは愛想笑い、そんなストラヴィンスキーめがけてやおらジェンキングは厚底靴を繰り出していた。かと思えば何の断りもなく真正面からだ。むんずとストラヴィンスキーの両肩を掴む。丹念に肉付きを探って腰の位置を確め、ゆっくりとし

た動作で背後へ回り込んだなら、オマケとばかり尻もひと掴みしてみせた。
「ぅわっ、は」
「あなた……、この眼鏡、取ってもらえます？」
跳ね上がったストラヴィンスキーへ投げる視線はとにかく鋭い。刺されたならノーとは言えず、こわごわだ、ストラヴィンスキーは目玉を小さく窪ませていた眼鏡をはずしていった。
「こ、これでどうでしょうか……」
その顔をジェンキングは、これでもかと見回してゆく。
やがてひときわきつく両目を細めてみせた。
「お兄さんならオーケーよ」
瞬間、出たいわけでもなんともなくとも、周囲から嫉妬のオーラが立ち昇ったことは錯覚でもなんでもないだろう。
「どういう、こと……」
ハナも呻く。
だとして目もくれないジェンキングはスカジャンのポケットからもう携帯電話を抜き出しており、早くもスタッフへ通話をつなげていた。

「……あ、ハッシー、忙しいところゴメン。もしかしたら増えるかもしれないの。うん、そう。初めて。間に合う?」
「いや、出るのはちょっと」
慌ててストラヴィンスキーは口を挟むが、人はこれを身から出たサビ、と呼ぶのである。
「何言ってるのよ、おかげで丸く収まったんだから頼んだわよ、ウチのジェンダープリンス」
「なんですか、それっ」
ハナの復讐は分かりやすく、ハートもその背をこれでもかと叩きつける。
「これも仕事だ。最後までやり抜け」
「他人事だと」
言い合ううちにもハッシーらしきモヒカンヘアの人物は、ステージへ姿を現していた。
「ただし」
駆け寄る姿を確認したジェンキングが、言って誰もへ振り返る。
「女のコも見つかればですから。男女の数が合わないと進行状、無理です。その場合は諦めていいただきますから」

「ホイ。じゃあ以上の身だしなみを守ってもらったうえで、来月からよろしくお願いします」

ビジネス街に残された映画館、「２０世紀ＣＩＮＥＭＡ」の小さな事務所で田所俊（タドコロトシ）はオリエンテーションを締めくくる。

契約社員となってはやくも一年。映写の技術にはまだ不安があったが、こと接客に関しては社員への声が掛かってしかりのキャリアがある。社員として一人立ちできるようになった田所は、だからしてアルバイトの管理を任されると、こうして初めて自身が面接し、採用を決めた大学生二人を前にヒザを打っていた。

よろしくお願いします。

折り目正しく一礼する二人は、映画好きであることはもちろん爽やかな真面目さが好印象だ。

選んで間違いなかった。納得できる様子に自身の時を過らせる。自分もこんな風に見られていたのだろうか。いつの間にか過ぎ去ってしまった時を懐かしく思った。

「最後に。ちょっと待っててもらえるかな」

とはいえ役回りはまだ慣れない。余計だと知りつつも浮かべてしまう愛想笑いで椅子を

離れ、事務所の鉄扉を押し開けた。向こう側をのぞき込み、見えた背中へ冗談めかし呼びかける。

「百々先輩、百々先輩、ちょっとこっち来てもらっていいですか？」

なら傷だらけのカウンターから百々未来（ドドミライ）は振り返っていた。

「はぁい。今、行きます」

傍らには段ボール箱が積み上げられている。手にしていたのは前売り券の帳簿で、しまい込んで埃っぽくなった手を百々は叩く。そのいでたちはマスタードイエローがお馴染みの制服ではない。味気ないほどシンプルな、いつも通りの私服だった。

気付けば百々がアルバイトを始めてから丸三年。ついに「２０世紀ＣＩＮＥＭＡ」もデジタル上映の導入を決定すると、乗じてフロアの大幅改装もまた決行。休館となった劇場内では今、明日から始まる工事に備えて大掃除が行われている最中だった。

「来月から入る新人さんに紹介しておくから」

「わ、緊張するな」

そして「先輩」と呼ばれる通り、流れた月日の分だけ百々も今では「２０世紀ＣＩＮＥＭＡ」の主力戦力だ。

鉄扉をくぐれば誰もいない事務所の片隅に、借りてきた猫かと小さく並んで座る二つの

背中はあった。回り込んで田所もろとも前に立ち、異様なほど緊張している二人へ研修の担当だと紹介される。分からないことがあれば何でも聞くように、と田所に「先輩風」を吹かされまくったなら、よけいに恐縮してみせる二人へ楽しくやろうね、と笑いかけて、なおさら固い、よろしくお願いします、の声を受け取った。

「じゃっ、来月からよろしくな」

そこまでがマニュアルだ。

終えて放たれた田所の笑みこそ本心からのものだろう。

見送られて失礼します、と最後まで、気を抜くことなく二人は帰ってゆく。

季節がまたひとつ、変わろうとしていた。

「さってッ。そっちはもう終われそうか」

大きく伸び上がった田所が、一仕事済んだと言わんばかり真面目と結んでいたタイを引っ張り、緩めてみせる。百々も見回し腰へ手をあてがうと、知らぬ間に凝り固まっていた体を振って、ほぐしにかかった。

「あと少しかな。そうそう、カウンターもレジも新しいのに変わるってことで間違いなかったよね」

「おう。自動券売機だぜ、自動券売機っ」

力説する田所は興奮気味だ。
「座席案内しながら選んでもらうの、好きだったんだけどなぁ。なんだか味気ない」
「ま、な」
だからといって百々は同調しきれない。それもこれもいつかレトロな風景と、懐かしむことがあるのだろうかと思ってみる。辿り切れぬほどまだ先のことになりそうなら、引き揚げ田所へ返していた。
「えっと、シアターＢに荷物、放り込んだら手は空くよ」
「ならここの机、Ａへ出すから手伝ってくれっか？」
業務用のゴツいプロジェクターが奥の映写室へ搬入されるのだ。撤去しておかなければならない。
「了解。その前に、ワックスがけも終わりそうか見ておくね」
言うそれは座席足元のピータイルである。本来なら専門業者に委託するだろう作業も、「２０世紀ＣＩＮＥＭＡ」では半期に一度、自分たちの手で塗りなおしていた。今回、改装はフロアのみでシアター内は温存される予定にあったが、だからこそ塗り替えだけでもしておこうと、急遽、決められたそれはメンテナンスだった。
「ああ、だな。んじゃその間に俺、新人のシフトだけでも組んで送っておいてやるか」

言ってどっか、と田所はスチールテーブルの前に腰を下ろす。気合をいれなおすと使い込まれたノートパソコンを立ち上げた。つまり今、劇場を仕切っているのは田所一人、というわけだ。

いない水谷は明日から入る改装にビルの管理会社へ出かけていた。映写係の松川はデジタル上映の技術研修と、同じ機材を置く近隣の劇場へ出向しており、田所が社員になるまでは唯一の営業社員として働いていた橋田もリニューアルオープンの告知やその後の宣伝を任されると、このところ劇場にさえ顔を見せていない。

それぞれの奔走がやがて実を結ぶだろう「２０世紀ＣＩＮＥＭＡ」の明日は、間違いなくかつてない賑わいに満ちるはずだった。その確信こそ百々の中で揺らぐことはなかった。

「終わったら先に帰るね」

だからしてこの分だと今日も遅くなりそうで、田所へとひと声かける。

「ああ。俺もなるべく早く片付けて帰るわ」

返す田所に言い淀むところはない。

などと、事実はまだ職場の面々へは内緒だった。そして荷物もまだ半分が家にある。だがお家デートと始まった田所の部屋通いはいつしか百々を合鍵、預かる身へ変えて、ついに三カ月前、田所が両親へ挨拶に訪れたその日をきっかけに二人は同棲を始めていた。

そうか、これがか。
思わなかったことがないこともない。
だが実際のところ高給取りでもなければ手厚い保障に守られているわけでもない互いは甘い字面へ妄想巡をらせるヒマを与えず、生活に追われて合宿状態、互いは互いを頼りに日々、サバイブしているような具合だった。
「そういやあ」
と、キーボードを弾き始めたところで田所が、事務所のホワイトボードへと頭をひねる。
「明日の工事立ち合い、支配人が出るからいいって言われてるしな」
呟きその背を百々へとよじった。
「帰ったらアベンジメンシリーズ、行けるところまで一気見するか」
それが様々な主人公を十数年にわたり登場させ、多面展開で巨悪と闘ってきた人気シリーズかつ、リニューアルオープンの目玉作品だったなら、見そこねていた百々の目は、音がするほどに瞬きを繰り返す。
「おおう。見る見るっ。もう間に合わないかと思ってたよ」
決まれば目指せ定時退社、が合言葉となっていた。
百々も、えいえいおー、で事務所を後にする。

カウンターに収納されていたあれやこれやの納まる段ボール箱を、それから三往復でシアターBへ移動させた。撤去されるとはいえ長年の労をねぎらったところでバチは当たるまい。素っ裸にされ恥ずかしそうなカウンターを丹念に拭きあげる。

みな四時あがりなのだから、そろそろワックスがけも終わっていなければならないだろう。腕時計の三時二十分を確認したところでカウンター前からきびすを返した。

「あ、支配人」

正面扉を押し開けて、そのとき水谷は管理会社から帰ってくる。

お疲れ様です。

姿に百々は言いかけていた。水谷の耳に携帯電話があてがわれていたなら、言葉は飲みこむ。話す水谷は口調がいかにも業務事項のようで、ままに事務所を目指し歩み寄ってくる。かと思えば会話に集中していた目を百々へと向けた。

何だ。

ニコリともしない水谷に、百々がうがったことは言うまでもない。

ならたどり着いた百々の前で水谷は、耳元にあった携帯電話を百々へ向かい突きつけていた。

「百々君、電話」

「は？」
いや、それは水谷の電話だろう。
「早く出て」
だが振って促す水谷は、今すぐに、と熱い視線を送っている。振ってグズグズしない、と急かしさえした。
「へ、へぇ？」
押されて受け取った電話は違和感に満ちている。だからしておずおずだ。百々は電話を耳へ押し当てていた。
「もし……、もし？」
「俺だ」
一言目に聞かされる。
「レっ、レフぅっ？」
跳ね上がるほかない。
と言うかその切り出し方は特殊詐欺ではなかったのか。
「どっ、どこにかけてるんですかっ」
ツバを飛ばしていた。

「お前の携帯がつながらなかった」
当然だろう、仕事中である。百々は言いかけ、即座にレフに遮られていた。
「水谷から許可は取ってある」
「はいぃ？」
「時間がない」
だから過去、それはもう幾度も体験してきた間合いである。
「今すぐ来い」
案の定、展開を食らわされていた。
「ＳＯ　ＷＨＡＴ　だ。ファッションショーに出ろ」
「ふあぁ？」
呻かずにおれず、
ＳＯ　ＷＨＡＴ、ファッションショー。
ＳＯ　ＷＨＡＴ、ファッションショー。
ＳＯ　ＷＨＡＴ、ファッションショー。
切って、繋いで、繋がらず、とおっ、で両者をうっちゃり投げ捨てる。
「っていうかソレ、あいだが抜けすぎなんですけどっ」

「説明は後だ。二万人の安全がかかっている。病院から乙部のヘリに乗れ。病院までは今、署の人間に迎えに行かせている」
「だぁぁっ」
もう断る時間の欠片もなさ過ぎて無茶苦茶が沸騰していた。
つまり気になり始めるのは気配というやつで、百々は咄嗟に正面入り口へと首を突き出す。間髪入れずすりガラスへ人影が映り込んだんなら身を震わせ「ウソ」を連呼した。だが現実と正面扉は開き、刑事らしき男女はそこに姿を現す。
「わー、わー。むりむり。無理ですぅっ」
拒んで騒げど二人はまっすぐ歩み寄ってくる。
そんな二人は「恐れ入ります百々未来さんですね。緊急です」と告げたところまでが丁寧だった。「ご案内いたしますので、ご協力お願いいたします」を告げたところで百々の両脇をがっしり抱え上げる。
「でっ。だっ。わぁ」
逃げ出さなかったのは欠片も悪いことなどしていないからだ。だというのに強制連行。まに表へ引きずり出される。
百々君がんばって。

すれ違いざまその手から、携帯電話を取り戻す水谷の眼差しは熱かった。
いやだ。
ひとつも言えず百々は覆面パトカーに乗せられる。涙目のまま国道を、警察病院へ向かい走った。

「百々さん、劇場を出ました」
もはや彼女は予備人員である。確かに繰り返される自宅と職場の往復に居場所の特定は容易で、状況説明もその半分が省けるのだからありがたい。のみならず二十代の女性とくれば今回、彼女の名が出たとき退ける要素はなかった。
この時のため保管されていたのではなかろうか。連絡先を所持していたレフの手配も早ければ、保管庫から持ち出した端末端末の画面を立ち上げながら曽我は考える。
「ヘリ到着は？」
「飛ばして、三十分後かな」
返された乙部の声に、時刻もまた確認した。
「遅くなりました」

非番のオペレーターもそこでようやく駈け込んでくる。これで夜勤明けと、交代に現れた一人を加えた三人態勢は整っていた。

「開場に間に合えば十分よ」

とはいえ、かつてに比べれば半数以下と貧弱だったが、予算で維持できる最大なのだからどうしようもない。

「人身事故に引っかかって。すみません」

足元へ買い物袋を押し込んだオペレータが私服のまま、インカムを装着する。

「外田です。ジェンキングさんの動画に書き込まれているコメントなんですが」

見えていたかのようにストラヴィンスキーから通信は入っていた。

「アンチコメントのチェック、優先してもらってもかまいませんか。ジェンキングさん、やたら今回はイタズラだと言い張るんですけれど、根拠にどうも日頃から似たようなコメントが書き込まれているようなので」

そんな声の向こうは雑踏かと騒がしい。

「進めてる。了解。今、一人、駆けつけてくれたところだから重点的に当たってもらうわ」

同時に視線を送れば私服オペレーターもうなずき返していた。

「進行表の配信準備整いました」

声は夜勤明けのオペレーターからだ。
「オーケー。こっちの端末にも飛ばしてくれる？」
「分かりました」
まもなくアイコンは手元の端末へ浮かび上がり、指で弾いて曽我はざっとデータへ目を通していった。

「あった」
聞えて吹き込み終えたマイクから顔を上げる。そこで先を行っていたいたジェンキングは足を止めると、並ぶハンガーラックの中へ手を突っ込んでいた。通路に無数と並ぶ中からアースカラーがナチュラルな一着と、おっつけ黒をメインにしたマントのような一着を掴み出す。
「コレとコレ、彼に着てもらうから変更、お願いね」
ハッシーへ手渡し、引き連れ再びハンガーラックの列をなぞった。
「ＢＧＭと同時に進むショーはノンストップで七十五分。男女合わせて三十人単位で六回転します」

ちらり、振り返ってストラヴィンスキーがついてきていることを確かめるなり話し出す。
「グループごとに全員がランウェイを歩き終えてから袖へハケるを繰り返す構成で、フィナーレは全員でランウェイを歩いて観客へご挨拶を。もちろんボクを先頭にね。今の二着はそのうちのスタートから十五分と、四十五分のお衣装です。ステキでしょ。もちろんステージへ上がるタイミングはタイムキーパーが誘導しますけれど、着換えの時間はどれも十分ほどしかないから本番では絶対トチらないように」
　これはなかなか片手間に済いそうもない。
「準備が出来たら立ち位置の確認と、ウォーキングもチェックさせていただきますから」
　思い過らせていれば告げられストラヴィンスキーは、てんでバラバラに表情筋を引きつらせた。
「うぉ、ウォーキング、ですか」
「大したことはないですよ」
　言うジェンキングは間もスタッフやモデルらとすれ違うたびにアイコンタクトを送り、手を振り返している。仕草は流れるかのように優雅で威厳と愛嬌に満ち、キングは確かにショーの中心に君臨していた。
「テーマは自分らしく。だからみんなにも好きなように歩いてって言っています。ただあ

んまりひどいとボクの服が泣くので、一応は」
　いや、それが最も高いハードルだろうと思えてならない。
「で、これがフィナーレのお衣装」
　更衣室のドアが見え始めた辺りだ。ハンガーラックからひとたびジェンキングは一着、引き抜いてみせる。その上から下まで真っ白な生地はどこか紙のような加工が施されていた。眺めてストラヴィンスキーへあてがい、いっとき真剣な面持ちになったジェンキングはそれもまたハッシーへリレーする。
「みんな白でデザイン違いなんです。間違えないように自分の衣装はしっかり覚えておいてください」
　釘を刺したところでもうひとつ、と眼鏡は外してもらえるんだろうなと確かめた。
「え、ま、もしもの時のためにコンタクトは常備してますので」
「準備、終わったら声かけて」
　当然、と愛想もなくハッシーにだけ告げて立ち去りかける。往来の中でふい、と立ち止まるといまだ信じていない、というような顔を向けてみせた。
「本当に女の子、来て下さるんですよね」
「ええ、それは間違いなく」